

生源寺 美子（しょうげんじ はるこ）（1914— ）

戦後の日本児童文学界の発展を支えてきた女性作家の一人、生源寺美子氏は、今年1月で百歳を迎えられた。50歳頃から本格的に創作活動をはじめ、幼年から思春期の子どもたちのために100点を超える作品を発表している。ここでは、ふるさと福島に関わる作品を中心に紹介する。

【プロフィール】

1914（大正3）年、柏木三郎夫妻のもとに五人姉妹の末っ子として生まれる。出生地は奈良県。1歳になる前に、両親の郷里である福島県に移る。師範学校の校長等を歴任し教育界で活躍した父親の転勤で、幼少期を東北や関西地方で過ごし、さらに、朝鮮（現・韓国）に渡り、京城公立第一高女、大邱公立高女での女学生時代をへて、日本に戻り、東京自由学園高等部（旧制）を卒業する。

【主婦から童話作家へ】

幼少期から書くことに興味を持ち、本好きだったという。戦前戦後の10数年は主婦業に専念していたが、子育てが一段落した頃から、家事の傍ら童話を書き始める。1955（昭和30）年頃に『婦人朝日』（朝日新聞社発行）という雑誌の「私の童話欄」に投稿し何度も入選を果たす。当時、その童話欄の選者だった詩人で児童文学者の与田準一氏の指導をうけ、同じ入選仲間の岩崎京子らと「童話の会」を結成、同人誌「童話」を作り創作に励む。1960（昭和35）年には、同会初の童話集「茶の間のしゃぼん玉」（カワイ楽譜）を発刊。あとがきに、生源寺氏自身が「家庭の仕事のあいまいに、胸におさめかねたなにかをひとりかきつづっていた。子どもを持つ母親であれば自然に童話の形をとっていた」と述べているように、それぞれの作品は、日常生活のひとこまが描かれており、そのまなざしは母親として、子どもたちへの愛情にあふれるものであった。

また、この「童話の会」で一緒だった中沢笑子氏が、福島県郡山市で「クローバー子供図書館」を開設（1952（昭和27）年）し、全国に先駆けて家庭文庫活動をしていた金森好子氏の叔父と知り合いだった縁で、会のメンバーが「クローバー子供新聞」（同館発行）に童話を寄稿している。生源寺氏も「しもやけうります」というユーモラスな作品を発表しており、それらの作品は、1966（昭和41）年に『まつりの子』（クローバー詩文集5）として編集され発行されている。



1965（昭和40）年には、「春をよぶ夢」という少女の成長を描いた作品で、第6回講談社児童文学新人賞を受賞する。後に『草の芽は青い』（講談社刊）として出版され、翌年、第13回産経児童出版文化賞も受賞している。この作品で作家への第一歩と踏み出したと言われ、その後、意欲的に創作活動に取り組み、歴史、伝記、翻訳のジャンルまで幅を広げ、次々に作品を発表する。

【ふるさと福島—児童文学の拠点】

生源寺氏は、1994（平成6）年に、『文化福島』（福島文化センター編、10月号）の「私のふるさと」欄に、長沼町（現・須賀川市長沼町）について次のように語っている。

「父母も祖父母も根っからの福島っ子で山深い勢至堂には先祖代々の墓がひっそりとしげまわっている。私は父の仕事の関係で日本各地を転々として育ちましたが、学齢前後4年余り棲みついた郡山市郊外の生活が未だに記憶鮮やかで、なつかしい思い出がつぎつぎに浮かんでまいります。育ちざかり、遊び

さかりに田んぼや小川に囲まれてたっぷり自然めぐみに浸ることのできたあのころ！あのころこそ、私にとって何ものにも替えがたい貴重な倖なときだったと思います」そして、さらに、前述の『草の芽は青い』は「郡山での幼児の生活を軸として書き上げたもので、それはその後の数々の作品の背景にもたびたび登場し、自分の児童文学の拠点である」と述べている。その代表的なものとして次の作品がある。



『雪ぼっこ物語』（童心社）1977（昭和 52）年

福島県の雪深い貧しい山村に生まれた少女が、ひたむきに生き抜いて、こけしづくりの女工人になるまでの生涯を描いた作品。作者自身が語り手の立場をとり、幼少期少期の生活体験やこけしに関する様々な調査資料を生かして書かれている。

第 15 回野間児童文芸賞を受賞した長編力作。



『やさしく川は流れて』（ポプラ社）1992（平成 4）年

『きらめいて川は流れる』（ポプラ社）1993（平成 5）年

『そして今日も川は流れる』（ポプラ社）1996（平成 8）年

自伝三部作といわれている。作者が幼・少女期を過ごした、福島や、秋田、京都を舞台にしている。人の一生を川

にたとえ、家族の生活を船になぞられ、関わっている人々の様々な人間模様を丁寧に描いた作品。

2 部目は、青少年読書感想文全国コンクール（主催・全国学校図書館協議会）の課題図書となった。

【子どもたちへ「生きる力」を】

生源寺氏は「人間を描く作家」として高い評価を得ている。特に思春期前後の少年少女心理をよく捉えての心のひだを描くことに巧みな独特の作風を持っているといわれている。主人公は、どんなに厳しい現実にも退くことなく、常に真実に立ち向かって逞しく成長していく。そのひたむきで人間味あふれる生き様を丁寧に描き、子どもたちへ、「生きる力」を、生き抜いた先にある喜びや幸せを伝えようしている。そこには、童話を書き始めた頃から変わらない母親「いつの時代も子どもの未来が希望に満ちていること」を願う思いと暖かいまなざしを感じる。

「小さな 草の芽、
力いっぱい伸びようとする草の芽
草の芽は 青い、
草の芽は つよい、
あなたたちこどものように。」 『草の芽は青い』より

■参考文献

- ・「つねに新鮮な作家－生源寺美子さんについて－」『日本児童文学』（児童文学者協会）1981
- ・『日本児童文学大事典』（大阪国際児童文学館 編・発行）1993
- ・『現代日本児童文学作家事典』日本児童文学臨時増刊号（日本児童文学協会 編・発行）ほか
〈 児童資料チーム 大崎真希子 〉